



Title	報告3 儒家の法思想
Author(s)	沈, 在宇; 岡, 克彦//訳
Citation	北大法学論集, 44(4), 236-242
Issue Date	1993-12-20
Doc URL	<a href="http://hdl.handle.net/2115/15544">http://hdl.handle.net/2115/15544</a>
Type	bulletin (article)
File Information	44(4)_p236-242.pdf



[Instructions for use](#)

## 報告3…儒家の法思想

沈 在 宇

岡 克 彦 訳

## 一 序論

儒家の法思想は徳治主義と礼治主義からその特徴を探つて見ることが出来る。徳治主義は孔子・孟子によつて主張され、礼治主義は特に荀子によつて主張された。韓非子の政治主義のよきな法家の思想はいまだに儒家からは探してみることができないだけでなく、彼らによつて断固に拒否された。

今日すべての国家は法治主義を取っているけれども、その法の効力の側面から眺めると、徳治主義と礼治主義がどれくらい大きな影響を及ぼしているかを知ることができる。李恒寧先生の法の効力における信頼説のようなものは、正にこの点をよく

示している。すなわち、治者と被治者の間に信頼がなければ政治というものが成り立ち得ず、法は国民によつて守られなくなるのである。すでに孔子も足兵、足食、足信の中で信を最上位の社会価値として取り入れたのであり、それがなくては政治というものは存在することができないことを指摘したことがある<sup>(1)</sup>。今日も不徳な治者は国民から不信を受け、その地位から退くようになっていく。一つの国の秩序を立てるといふ本質は法のみならず徳と礼にも秩序力を持つてゐることを看過してはならない。特に、東洋においては、さらにそうである。

二 徳治主義

孟子の徳治主義は王道主義にその根本を置いてゐる。王道主義は二帝三王の先王之道に従つた治世法を言うのであるが、その内容は仁政と徳治である。仁政は人間の道德的本性を尊重し、それを保護する人道主義的政治を行なうことを言うのであり、徳治は王が聖人としての徳を修め、その徳性でもつて民衆を善に導き治めることを言うのである。この点を孟子は次のように述べてゐる。

“聖人は人倫の極致である。王の務を行なおうとすれば王の道を果たさなければならず、臣下の務を行なおうとすれば臣下の道を果たさなければならぬ。この二つはすべて堯舜を模範としなければならぬだけである。舜が堯の王に仕えていた通りに、王に仕えなければ王を敬まわぬ人になり、堯の王が人民を治めていた通りに人民を治めなければ人民を害する人になる。孔子は「道は二つである。仁でなければ不仁があるのみである」と言つた。人民に甚だしい暴政をすれば体は弑害され、国は滅び、その暴政が甚だしくなくとも体は危ぶまれるようになる、国は傾くのである。”<sup>(2)</sup>

このように、治者が仁政を行ない得る可能根拠を孟子は彼の性善説に立脚した道德的人間観から眺めるのである。彼の人性

論が国家哲学として持つ意義は人道主義的支配を可能にさせることにある。すなわち、治者や被治者すべてが同じ道德的存在としての人間であるので、人間の根本の下に統治が行なわれなければならず、かつ行なわれるようになり得るのである。それで、彼は次のように言う。

“むかしの先王は不忍人之心があつて残忍さのない政治を行なつていた。この不忍人之心を持ち残忍さのない政治を行なえば天下を統治することはまさに手の平の上で動くように容易である。”<sup>(3)</sup>

ここで、“不忍人之政”は人道主義的仁愛の政治、すなわち、仁政を言うのであり、それは聖人である仁者だけが行なうことができるという。

“聖人がすでに心と考えをすべて果しそれに統いて不忍人之政を行なつたので、仁が天下を覆つたのである。……だから、政治をするのに、先王の道に従わなかつたとすれば賢明だと言えらるであらうか。だから、唯仁者だけが高い地位にいるにあさわしい。不仁な者が高いところにいればそれは悪を人民に振り撒くのである。”<sup>(4)</sup>

孟子のこのような仁政思想の政治哲学的意義は治者が被治者を仁でもつて、人間らしく扱うようになって、はじめて、王道

政治が成り立ち得るのであるということにある。人間の道徳的本性である仁こそが王道の根本であり人道主義的政治の核心的徳治である。

王道主義の違つた一つの側面は徳治にある。儒家の治道は權力による法治よりも善教による徳治を重要視する。すでに孔子も論語で法治より徳治がより重要であることを述べている。すなわち、

“民を法でもつて導き刑でもつて治めれば、彼らは法の網をかいくぐり刑を逃れることを恥と思わない。しかし、徳でもつて導き礼でもつて治めれば羞恥の念を持つようになり、秩序も正しく保てるようになる。”<sup>(5)</sup>

また論語を見ると

“季康子が孔子に問い、無道な罪人は死刑に処し人民をして怖れさせて正しい方向に進めさせることはいかがでしようか。

これに孔子が答えるに、君子が政治を行なうにおいて、どうして殺人を行なわなければならないのか。君子が自ら善良であらうとするならば、人民も善良になるようになるであらう。君子の徳は風であり、小人の徳は草であつて、風を受ければ草はかならず頭を下げるのだよ。”<sup>(6)</sup>

季康子が孔子に政治について尋ねたとき、孔子は次のように

答えている。

“政治は正しいことを行なうことである。君子が率先して正しく行なえば誰が敢て正しく行なわないだらうか。”<sup>(7)</sup>

また、孔子は次に言っている。

“上の者の態度が正しければ命令をしなくとも民は行ない、その態度が不正であればたとえ命令をしても民は従わない。”<sup>(8)</sup>

孔子のこのような言葉はすべて徳治主義を代弁している。孟子も徳治が法治よりも優越することを次のように強調する。

“法でもつて行なう善政は徳でもつて行なう善教が民を教化することよりも劣る。法でもつて行なう善政は民がこれを恐れるけれども、徳でもつて行なう善教は民がこれを愛する。従つて、善政は民をして税金をよく出させるが、善教は民の心を得させる。”<sup>(9)</sup>

孟子は続いて政治の根本も君主の徳にあることを強調する。

“人の不足も責ることができず、政治の不足も非難することができない。却つて、大きな徳を持った者だけが君主の心の間違いを正すことができる、君主が仁慈を施せば、誰でも仁慈を施せざる得ず、君主に義があれば誰でも義を持たざる得ず、君主が正しければ誰れもが正しかざる得ない。一度、君主が正しくなれば国も安定するようになる。”<sup>(10)</sup>

道徳でもって仁政を実行する者が王者である。孟子は王道主義を霸道主義と明確に区別する。王道とは仁でもって人民を治める仁政を言うとするれば、霸道は権力でもって人民を治めることを意味する。霸道も上辺は仁政を仮装するが、彼らの政治的目的と動機は王道と全く違っている。王道は人民のために治めることであるけれども、霸道は自己自身のために人民を治めることである。すなわち、自己自身の利益と名声のために治めることである。従って、王道では人民が政治の目的となっているが、霸道では人民が政治の手段に転落している。孟子は次のように述べる。

「権力でもって仁政を仮装する者は覇者である。覇者はかならず大きな国を持つ。しかし、徳でもって仁を行なう者は王者である。王者は大きな国を持つ必要がない。湯王は七十里でもって王者となったのであり、文王は百里でも王者になることができたのである。力で人を服従させることは心から服従することではなく、力が不足のために仕方なく服従するが、徳でもって人を服従させることは心の中から真実に喜んで服従するのである。」<sup>(11)</sup>

以上から見たように、孟子において支配の倫理的正当化は仁政と徳治による王道主義にある。反面、霸道主義は権力と武力

でもって統治をするのでその支配は倫理的に正当化され得ないことを示している。

### 三 礼治主義

孟子は性善説に依拠して仁義の徳でもって治める徳治主義を治道の本としたが、荀子は性悪説に依拠して礼治主義を社会秩序確立の原則とした。彼の礼治主義思想は性悪説より出発するのである。彼は次のように述べる。

「人間の本性は悪である。善だと言うのは偽りである。人は生まれながらに利益を好むために、これに従えば争奪が起り譲歩することがなくなる。人は生まれながらにして人に嫉妬し人を憎むために、これに従えば他人を害するようになり、忠と信がなくなるようになる。人は生まれながらに耳と目の欲望があり美しい声と色を好むために、これに従えば淫乱が生じ礼儀と秩序がなくなるようになる。人の感情に従えば争奪が起り、分別を守らなくなり、秩序が紊乱することになって、無秩序に至るようになる。……このように見たならば人の本性が悪だといふのは明らかである。これが善であるといふのは偽りである。」<sup>(12)</sup>

荀子によると、「人の本性は善だ」とする孟子の性善説は間

違いということになる。もし人間の本性が善であり正義と秩序に合致する行為を自ら行なうことができるならば聖王がどうして必要とし、礼儀と法度を立てなければならぬ必要がどこにあるのかと反問する。人間の本性が悪であるので無秩序と争奪が起ころるのであり、そのために聖王と礼儀と法度が必要になったのだと言う。

“人間の本性は悪である。だから、むかし聖王は人間の本性が悪であり陰險であり偏僻であつて正しくなく秩序を紊乱させるために、王の権勢を立ててその上に君臨させ礼儀を明らかにこれを教化し、正しい法度を作り民を治めたのである。そして、刑罰を重くし民の悪なる行動を禁止したのである。これが聖王の統治であり礼儀の教化である。今、試みとして王の権勢をなくしてしまい、礼儀を通じて教化を中止し、正しい法度の統治をなくしてしまい、刑罰による禁止を廃止して天下の民達がどのようにに交わつて生きるのかを一度見るがよい。そのようになれば強者が弱者を害するようになり奪取するのであり、多数の輩は少数の輩達に暴力を加え彼らを屈服させるであらう。天下が乱れるようになり滅びるあり様を見るのは休む暇さえもないぐらゐである。だから、人の本性が悪であることは明らかである。”<sup>(13)</sup>

荀子のこのような人性論の前提は西洋のホッブス(Hobbes)の立場と同じである。ホッブスは人間の欲望と性情の追求のために自然状態では人間は“万人の万人に対する闘争状態”に置かれるようになり、人間は人間に対して狼になるといふ。人間が利己と欲望を追求することがそれ自体、悪いことではない。しかし、それによって他人に及ぶ社会的効果が反社会的である。すなわち、その効果が悪だということである。だから、

社会契約を通じて国家を立て法秩序によつて平和な共存条件を設けるのである。荀子においても詳しく見れば利己的な心性と欲望追求自体が悪だというのではなく、他人に及ぶ効果が悪だというのである。だから、法度を立て礼儀を定め教化すれば、他人に及ぶ効果においても善になるようになるのである。しかし、この善は教化を通じてはじめて成就するものであるから、これは人為的に作られた作為の産物であつて人間の自然的本性ではないのである。だから彼が述べるには、

“礼儀というのは人の本性から生じるものでなく聖人の作為によつて生まれたのである。聖人が考えを重ね、作為を長い間、練つて礼儀を作り抜き法度を制定したのである。”<sup>(14)</sup>

以上で見たように、荀子は礼規範によつて社会秩序を維持することを願っている。この点は孔子においても同じである。

「顔淵が孔子に仁が何んであるかを尋ねたのであるが、孔子がこれに答えて、自己を克服し礼を行なうことが仁である。わずか一日でも自己を克服し礼を行なえば、天下が仁に戻つて来るであろう。仁は自己に依存することであり、他人に依存することではない。顔淵が再びその詳しい細目を尋ねるや、孔子が答えるに、礼でなければ見ることなけれ、礼でなければ聞くなかれ、礼でなければ話すなかれ、礼でなければ、動くなかれ。」<sup>(15)</sup>

#### 四 結び

東洋においての礼の概念は行為を統制し秩序を立てる規範として、その機能は法に等しい。但し、それが法と違う点は強制が随伴されないところにある。すなわち、礼は社会倫理の行為規範だけであつて、強制規範ではないのである。しかし、礼は他律的な強制力はないが自律的な規範力がないのではない、礼の遵守は教化を通した自律的規制能力を前提としており、この点で辞讓之心は礼の端だとする孟子の人性論と連結されている。徳治主義であれ、礼治主義であれ儒家の法思想の特徴は規範の強制性を排除しているところにある。強制性のない規範がどれほどの秩序力を保持することができるのかを疑う人もあるだろうが、強制性のある規範がどれほどの秩序力を発揮するこ

とができるかを疑う人もなくはない。今日の法万能社会でも犯罪が消えず、権力濫用がなくならなかつたとすれば、強制規範としての法の秩序力の限界を我々は率直に認めざる得ない。このような法規範の秩序力の限界を克服することは道徳規範としての徳と倫理規範としての礼を受け入れたときにだけ可能であろう。法の効力は強制によるのではなく、却つて徳と礼によつて担保されているという事実を我々は直視しなければならぬ。儒家の法思想が我々に教えてくれているのは正にこの点である。すなわち、それは徳と礼なくして、法のみだけでは人間社会の秩序は成立することができないということを悟らせてくれる賢明な教訓であることを忘れてはならない。

#### 註

(1) 論語、顔淵七・子貢問、政。子曰、足食足兵民信之矣。子貢曰、心不得已而去、於斯三者何先。曰、去兵。子貢曰、必不得已而去、於斯二者何先。曰、去食、自古皆有有死、民無信不立。

(2) 孟子、離婁章句上二・聖人人倫之至也、欲爲君盡君道、欲爲君盡臣道、二者皆法堯舜而已矣、不以舜之所以事堯事君、不敬其君者也、不以堯之所以治民治民、賊其民者也、孔子曰、道一、仁與不仁而已矣、暴其民甚、則身弑國亡、

不甚，則身危國削。

(3) 孟子、公孫丑章句上六…先王有不忍人之心，斯有不忍人之政矣，以不忍人之心，行不忍人之政，治天下可運之掌上。

(4) 孟子、離婁章句上一…聖人既竭心思焉，繼之以不忍人之政，以仁覆天下矣……爲政，不因先王之道，可謂智乎，是以惟仁者，宜在高位，不仁而在高位，是播其惡於衆也。

(5) 論語、爲政三…道之以政，齊之以刑，民免而無恥，道之以德，齊之以禮，有恥且格。

(6) 論語、顏淵十九…季康子曰：如殺無道，以就有道，如何。孔子曰：子爲政，焉用殺，子欲善，而民善矣，君子之德草，小人之德草，草上之風，必偃。

(7) 論語、顏淵十七、政者正也，子帥以正，熟敢不正。

(8) 論語、子路六…子曰：其身正，不令而行，其身不正，雖令不從。

(9) 孟子、盡心章句上十四…善政不如善教之得民地，善政民畏之，善教民愛之，善政得民財，善教得民心。

(10) 孟子、離婁章句上二十一…人不足與適也，政不足問也，惟大人爲能格君心之非，君仁莫不仁，君義莫不義，君正莫不正，一定君而國定矣。

(11) 孟子、公孫丑章句上三…以力假仁者霸，霸必有大國，以德行仁者王，王不待大，湯以七十里，文王以百里，以力服人者，非心服也，力不贍也，以德服人者，中心悅而

誠服也。

(12) 荀子、性惡篇…人之性惡，其善者僞也。今人之性，生而有好利焉，順是，故爭奪生而辭讓亡焉。生而有疾惡焉，順是，故殘賊生而忠信之焉。生而有耳目之欲，好聲色焉，順是，故淫亂生而禮義文理亡焉。順人之情，必出於爭奪，合於犯分亂理，而歸於暴……用此觀之，然則人之性惡明矣，其善者僞也。

(13) 荀子、性惡篇…人之性惡。故古者，聖人以人之性惡，以爲偏險而不正，亂而不治，故爲之立君上之勢以臨之，明禮義以化之，起法正以治之，重刑罰以禁止之，使天下皆出於治，合於善也。是聖王之治，而禮義之化也。今當試去君上之勢，無禮義之化，去法正之治，無刑罰之禁，倚而觀天下民人之相與也。若是則夫彊者害弱而奪之，衆者暴寡而誣之，天下之悖亂而相亡，不待頃矣。用此觀之，然則人之性惡明矣，其善者僞也。

(14) 荀子、性惡篇…凡禮義者，是生於聖人之僞，非故生於人之性也……聖人積思慮習僞，故以生禮義，而起法度。

(15) 論語、顏淵一…顏淵問、仁。子曰：克己復禮爲仁，一日克己復禮，天下歸仁焉，爲仁由乎哉。顏淵曰：請問其目。子曰：非禮勿視，非禮勿聽，非禮勿言，非禮勿動。